

近代小説等における「～ではありませんか」類と「～ではないですか」類の使用頻度について

嶺 田 明 美

1. はじめに

現在、口頭表現に用いられる「～ではありませんか」類と「～ではないですか」類¹の使用頻度を比較すると、「～ではないですか」類が多用されているようである。市川（2000）は、テレビの対談番組を資料にして調査したところ、10代～30代女性の40代男性に対する発話では、「～ではありませんか」類が全く現れなかったと述べている。

田中（1996）も、「ありません・ありませんでした」よりも「ないです・なかったです」の方が優勢であることを論じている。さらに田中（2008）では、昭和10年代までは、形容詞に「～です」が付く言い方は「非標準語的」であり避けられていたこと、「行かなかった」の「フォーマルな言い方」としては、現在のところは「行きませんでした」が有力ではあるが、日常的な丁寧体としては、「行かナカタデス」とともに「行かナイデシタ」も見られることなどを述べている。

それでは、「～ではないですか」類が、東京語として使用され始めたのはいつ頃からであろうか。小稿では、おもに小説を資料として、「～ではありませんか」類と「～ではないですか」類の使用頻度を探りたい。

2. 方 法

東京出身の作家の言文一致体成立以降の作品と、新聞と雑誌を資料とした。浅川（1999）は、形容詞承接の「です」について小説等を用いて調査した結果、明治20年代初頭の形容詞承接の「です」は方言や書生語の域を出ない、と述べている。また、田中（2008）は、ブログの中で形容詞に「です」を直接付けるのは関西や西日本系のサイトに多いと述べている。このようなことから、東京語としての性質を見るために、小説は東京出身の作家に限定した。

「～ではありませんか」類と「～ではないですか」類は、小説・随筆では、一部、回想場面などにもあるが、ほとんどが会話部分に現れた。新聞・雑誌では、インタビューや対談記事、読者投稿欄、新聞小説に多く現れた。これらの記事は執筆者の出身地が不明なものが多いが、一般的に広く読まれるものであるため、資料として採用した。

資料は次の通りである。

1 「～では」が「～じゃ」に縮約されたり、その語末が長音化した「～じゃあ」になる場合がある。また、「～ありませんか」の疑問の文末表現の「か」が、女性語では「かしら」で現れることもある。明治期の小説では、「～じゃ」が「～ちや」、「～じゃあ」が「～ぢやア」と表記されることもある。これらをまとめる言い方として、「～ではありませんか」類、「～ではないですか」類、と呼ぶことにする。また、後接部分の表記「～有りませんか」「～無いですか」もこれに含める。

2-1. 「青空文庫」(<http://www.aozora.gr.jp/>) を利用し、対象とする語を検索した小説等

- ・幸田露伴「五重塔」
- ・二葉亭四迷「あひゞき」「浮雲」
- ・尾崎紅葉「金色夜叉」
- ・夏目漱石「吾輩は猫である」「三四郎」「それから」「こころ」「明暗」
- ・有島武郎「或る女（前・後編）」「生れ出づる悩み」
- ・永井荷風「すみだ川」「湊東綺譚」「或夜」「西瓜」「にぎり飯」
- ・宮本百合子「伸子」「三月の第四日曜」「播州平野²」「二つの庭」
- ・岡本綺堂「鰻に呪われた男」「麻畑の一夜」
- ・堀辰雄「聖家族」「菜穂子」

2-2. 原本を利用し、対象とする語を抜き出した小説等

- ・永井荷風「船房夜話」「岡の上」「一月一日」「舊恨」「市俄古の二日」「長髪」「春と秋」「雪のやどり」（以上『あめりか物語』所収）、「おもかげ」「ひとり旅」（以上『ふらんす物語』所収）；『荷風全集』第2巻、大8：1919・春陽堂
- ・谷崎潤一郎「少年³」（『刺青・秘密』所収、平6：1994・新潮文庫）
- ・幸田文「おとうと」（『幸田文全集』3巻所収、昭33：1958・中央公論社）
- ・平岩弓枝「つんぼ」「神楽師」「狂歌師」（以上『鑿師』所収、昭34：1959・新小説社）、『随筆お宮のゆみちゃん』（昭42：1967・現文社）、『藍の季節⁴』（昭46：1971・文芸春秋）、『御宿かわせみ1⁵』（昭49：1974・毎日新聞社）
- ・宮部みゆき『淋しい狩人⁶』（平9：1997・新潮文庫）

2-3. 新聞・雑誌のデータベース

- ・国立国語研究所「ことばに関する新聞記事見出しデータベース⁷」（<http://www6.ninjal.ac.jp/sinbundb/>）。昭57（1982）年までの見出し記事を検索。
- ・「朝日新聞」昭58（1983）年～／「週刊朝日ニュース面」平12（2000）年4月～／「AERA」昭63（1988）年5月～…朝日新聞記事データベース「聞蔵Ⅱ」を利用。調査日は2011.10.6（朝刊まで）。

2 「播州平野」では、西日本方言的な表現が現れる。「～ではありませんか」類の例で、「おばあちゃん、去年から、大さわざしよったじゃありませんか。」があった。しかし、西日本的な表現を使わない登場人物が、「～ではないですか」類を用いており、宮本百合子が「～ではないですか」類を西日本的な表現と意識していなかったと判断し、資料として使うことにした。

3 「少年」は谷崎潤一郎が関西に移住する前の作品。

4 『藍の季節』に所収の「藍の季節」「本妻さん」「意地悪」に用例があったが、著作は同一年と見て表にはまとめて『藍の季節』として表した。

5 時代小説ではあるが、現代語に近い表現が用いられており、資料とした。

6 『淋しい狩人』に所収の「六月は名ばかりの月」「黙って逝った」「詫びない年月」「うそつき喇叭」「淋しい狩人」に用例があったが、著作年は同一と見て、表には短編をまとめて『淋しい狩人』として表した。

7 このデータベースは、国立国語研究所所蔵の「切抜集」（1949年以降、ことばに関する新聞記事を集めた「切抜集」。〈2009年9月末で終了〉）に収録されている新聞記事についての「見出し（目録）データベース」。

- ・国立国語研究所編（2005）『国立国語研究所資料 15 太陽コーパス』博文堂…雑誌「太陽」明 28（1895）年～昭 3（1928）年の検索。

3. 結果と考察

3-1. 年代毎の使用頻度と小説内の発話者について

年代および作品毎の使用頻度は、表 1 の通りである。

3-1-1. 明治 20 年代まで

明 20（1887）「浮雲」から明 28（1895）雑誌「太陽」までの間は、「～ではありませんか」類が、48 例に対し「～ではないですか」類は 0 であった。浅川（1999）では、形容詞承接の「です」は明治 10 年代末頃までさかのぼれる（作中の使用者が江戸生まれの下層町人「矢張旦那は御新造さんがおあんなさらないですか」『新潟奇聞娘演説』明 19 の例などをあげている）ことを述べ、また、明治 20 年代、形容詞承接の「です」を比較的多用する作家として二葉亭四迷をあげている。二葉亭四迷「浮雲」では、「～ではありませんか」類が 23 例あるが、「～ではないですか」類は使用されていない。形容詞承接の「です」は、真偽疑問文⁸では使われる一方で、同意要求・判断要求などをする場合には、「～ではありませんか」類が優勢で、「～ではないですか」類は用いられなかったのではないかとと思われる。

3-1-2. 明治 30 年代～

明 30（1897）～明 35（1902）「金色夜叉」に 4 例「～ではないですか」類が現れた。しかし、「～ではありませんか」類は、40 例あり、「～ではないですか」類は該当作品から抽出した用例総数の約 9% である。明 36（1903）～明 41（1908）に書かれた『あめりか物語』では、「～ではありませんか」類が 12 例、「～ではないですか」類は 1 例で、約 8% である。

以下、同様にそれぞれの作品毎の使用頻度をみると、夏目漱石は、「～ではないですか」類が、明 38（1905）「吾輩は猫である」では 1 例（約 2%）であるが、明 41（1908）「三四郎」では 4 例（17%）、明 42（1909）「それから」では 3 例（33%）、大 3（1914）「こころ」では 2 例（10%）使用している。徐々に増えているようにも見えるが、一方で、大 5（1916）「明暗」では、「～ではありませんか」類が 96 例あるのに対して、「～ではないですか」類は 1 例もない。

漱石が作品中で、「～ではないですか」類を使用させる人物は、「吾輩は猫である」では八木独仙 1 例、「三四郎」では広田先生 2 例、与次郎 1 例、野々宮君の奥に住んでいる家の主人 1 例、「それから」では代助 2 例、門野 1 例、「こころ」では先生 2 例で、いずれも男性である。反対に、「明暗」では、「～ではありませんか」類 96 例中、吉川夫人 25 例、お延 24 例、お秀 21 例、叔母 2 例、継子 1 例、下女 1 例で、女性の使用率が高い。男性の発話者は、小林 5 例（いずれも対「お延」）、爺さん 1 例（「彼の言葉遣いで東京生れの証拠を十分に挙げていた」という人物）、津田 16 例（対「吉川夫人」4 例、「清子」10 例、「叔母」2 例）であった。漱石は、女性には専ら「～ではありませんか」類を使用させている。また、男性であっても、目上や心理的距離の遠い人物に対しては、「～ではありませんか」類を使用

8 安達（1999）では、「佳織はギターを弾いていますか？」のように、「ギターを弾いている」という命題の真偽が不確定で、それを知っている聞き手に問いかけて情報を得る疑問文を、「真偽疑問文（Yes-No Question）」とよんでいる。

表 1

初出・刊行・成立年	作 者	作品名	ではありませんか	じゃありませんか	ではないですか	じゃないですか
明 20- 24 (1887- 1891)	二葉亭四迷	浮雲	0	23	0	0
明 21 (1888)	二葉亭四迷	あひゞき	0	1	0	0
明 24 (1891)	幸田露伴	五重塔	2	0	0	0
明 28 (1895)	太陽コーパス	会話部分	9	13	0	0
明 30- 35 (1897- 1902)	尾崎紅葉	金色夜叉	2	38	1	3
明 34 (1901)	太陽コーパス	会話部分	9* ⁴	14	0	0
明 36 (1903)	永井荷風	船房夜話	0	3	0	0
明 37 (1904)	永井荷風	岡の上	0	1	0	0
明 38 (1905)	永井荷風	市俄古の二日	0	1	0	0
明 38 (1905)	夏目漱石	吾輩は猫である	0	62	0	1
明 40 (1907)	永井荷風	一月一日	0	1	0	1
明 40 (1907)	永井荷風	舊恨	1	0	0	0
明 41 (1908)* ¹	永井荷風	長髪	0	3	0	0
明 41 (1908)* ¹	永井荷風	春と秋	0	1	0	0
明 41 (1908)* ¹	永井荷風	雪のやどり	0	1	0	0
明 41 (1908)	夏目漱石	三四郎	0	19	0	4
明 42 (1909)* ²	永井荷風	おもかげ	0	2* ⁵	0	0
明 42 (1909)* ²	永井荷風	ひとり旅	0	1	0	0
明 42 (1909)	永井荷風	すみだ川	0	1	0	0
明 42 (1909)	夏目漱石	それから	0	6	0	3
明 42 (1909)	太陽コーパス	会話部分	12	52	0	2
明 44 (1911)	谷崎潤一郎	少年	0	2	0	0
明 44- 大 2 (1911- 1913)	有島武郎	或る女（前編）	0	8	0	0
大 3 (1914)	夏目漱石	こころ	1	18	0	2
大 5 (1916)	夏目漱石	明暗	0	96	0	0
大 6 (1917)	太陽コーパス	会話部分	4	27	0	0
大 7 (1918)	有島武郎	生れ出づる悩み	0	1	0	0
大 8 (1919)	有島武郎	或る女（後編）	1	16	0	0
大 9 (1920)* ³	岡本綺堂	麻畑の一夜	0	2* ⁶	0	0
大 13 (1924)	宮本百合子	伸子	1	10	0	0
大 14 (1925)	太陽コーパス	会話部分	14	17	0	2
昭 5 (1930)	堀辰雄	聖家族	0	1* ⁷	0	0
昭 7 (1932)	岡本綺堂	鰻に呪われた男	1	0	0	0
昭 12 (1937)	永井荷風	湊東綺譚	0	0	0	3
昭 12 (1937)	永井荷風	西瓜	0	0	0	1
昭 15 (1940)	宮本百合子	三月の第四日曜	0	1	0	0
昭 16 (1941)	堀辰雄	菜穂子	0	1	0	0
昭 21 (1946)	永井荷風	或夜	0	1	0	0

初出・刊行・成立年	作 者	作品名	ではありませんか	じゃありませんか	ではないですか	じゃないですか
昭 21 (1946)	宮本百合子	播州平野	0	2	0	2
昭 22 (1947)	永井荷風	にぎり飯	0	4	0	0
昭 22 (1947)	宮本百合子	二つの庭	0	11	0	5
昭 31- 32 (1956- 1957)	幸田文	おとうと	0	1	0	1
昭 32 (1957)	平岩弓枝	つんぼ	0	1	0	0
昭 33 (1958)	平岩弓枝	神楽師	0	1	0	0
昭 34 (1959)	平岩弓枝	狂歌師	0	1	0	0
昭 42 (1967)	平岩弓枝	『随筆お宮の ゆみちゃん』	1	7*8	0	0
昭 46 (1971)	平岩弓枝	『藍の季節』	0	7	0	1
昭 49 (1974)	平岩弓枝	『御宿かわせみ 1』	0	16	0	1
平 5 (1993)	宮部みゆき	『淋しい狩人』	0	4	0	5
昭 60- 平 23 (1985- 2011. 10. 6 朝刊)	聞蔵Ⅱ 検索	朝日新聞ほか	3670	796	3184	9256

- *1 「長髪」「春と秋」「雪のやどり」の各章の成立年は記載がないため、『あめりか物語』成立年とした。
 *2 「おもかけ」「ひとり旅」の各章の成立年は記載がないため、『ふらんす物語』成立年とした。
 *3 初出がはっきりしない。大9刊行『慈悲心鳥』（国文堂書店）に所収。
 *4 うち1例は、「貴方は盗賊ではありませんか」であるが、意味的には「ではありませんか」と同じと考えた。
 *5 うち1例は、「伯爵津山と云ふ貴族。御存じやありませんか」。「御存」＋「じゃありませんか」とも考えられるが、他の箇所
 の表記は「ぢやありませんか」を使っており、また「御存じ」を他の箇所ですべて使っているため、これは「御存じぢやありま
 せんか」の誤りと考えられる。
 *6 うち1例は「そっと人間を攫って行くんじゃありませんかしら」で女性語の「かしら」が接続した形。
 *7 この例は、「あなたによく似ていますわ。あなたのお子さんじゃありませんの」で、女性語の「の」が接続した形。
 *8 うち1例は、「相手を大切に、二人の初夜までおたがいを守り合うべきだし、そうでなければ、本当に愛しているとい
 うことにはならないんじゃありません……」である。文脈から、断定ではなく、口頭表現で上昇イントネーションを伴う形
 だと判断した。

させる傾向があり、これが、「明暗」で「～ではないですか」類が出現しなかった要因とも考えられる。

雑誌「太陽」では、明 28 (1895)・明 34 (1901) で、「～ではありませんか」類が合計 45 例に対し
 て、「～ではないですか」類は 0 であるが、明 42 (1909) では、「～ではありませんか」類が 64 例に
 対して、「～ではないですか」類は 2 例 (3%) 見られた。

浅川 (1999) では、形容詞承接の「です」が、明治 20 年代後半から 30 年代にかけて、男性の使用
 に限定的ではあるが、東京出身者の間においても相当使用されるようになっていることを述べている。
 つまり、明治 20 年代には見られなかったが、同意要求・確認要求の「～ではないですか」類は、こ
 れに後れて、明治 30 年代から 40 年代にかけて、男性の口語体として現れ始めているといえよう。

3-1-3. 同一作家による年代の違い

その後も、「～ではないですか」類は散見できるがそれほど用例数の増加は認められない。ただし、
 作家によっては、多少の増加が見られる。

宮本百合子は大 13 (1924)「伸子」と昭 15 (1940)「三月の第四日曜」では、「～ではないですか」
 類は使っていないが、昭 21 (1946)「播州平野」では、「～ではありませんか」類 2 例に対して、「～
 ではないですか」類を 2 例、昭 22 (1947)「二つの庭」では、「～ではありませんか」類 11 例に対し
 て、「～ではないですか」類を 5 例 (約 30%) 使っている。

「播州平野」で「～ではないですか」類を使用するのは車掌と検事が 1 例ずつ、「二つの庭」では雑

誌社の木下徹が5例である。車掌に、切符のことでトラブルになった青年士官に対して次のように発話させている。

例1 私は車掌として事務をとっただけじゃないですか。ひとこと罵倒でもしましたか。じき手続をして上げますと云っただけじゃありませんか

例1を見ると、同一発話内に、「じゃないですか」と「じゃありませんか」を続けている。形態の使い分け意識がないものと判断できよう。

また、永井荷風は、明41(1908)『あめりか物語』、明42(1909)『ふらんす物語』、明42(1909)「すみだ川」では、「～ではありませんか」類が合計16例に対して、「～ではないですか」類は1例(『あめりか物語』の「一月一日」)であるが、昭12(1937)「湊東綺譚」、昭12(1937)「西瓜」では、「～ではありませんか」類は使用されておらず、「～ではないですか」類が4例認められた。

「一月一日」での使用者は、酔った男である。「湊東綺譚」の3例は、筆者が帚葉翁(友人)に対して、「西瓜」の1例は帚葉翁の筆者に対しての発話である。

同一の作家による「～ではないですか」類の使用が、昭和10年代あたりから多少なりとも増えているともいえる。これらの例も使用者は男性である。

3-2. 女性が使用する「～ではないですか」類

女性が使用する「～ではないですか」類は、資料の偏りがあるためか、年代が下ってもなかなか現れなかった。もともと、「～ではないですか」類が小説内であまり多くないことも理由になっているとも考えられる。

昭31～32(1956～57)「おとうと」の1例は男性(清水緑郎)の発話である。

平岩弓枝は、昭32(1957)「つんぼ」から昭46(1971)『藍の季節』で使用した「～ではないですか」類は1例のみで、男性の発話である。ただ、昭49(1974)『御宿かわせみ1』では、女性が使用している(例2)。

例2 だからお勝って人、泣いてあやまってたじゃないですか(主人公い→恋人で武士の東吾)

平5(1993)『淋しい狩人』では、5例中2例が女性の発話である(例3・4)。

例3 それで、さすがにがっかり気弱になったんじゃないですか(ヘルパーの淑恵→主人公イワさん)

例4 稔のこと、誰よりも可愛がってくださってるじゃないですか。お義父さんには、出掛けていってそのひとにひと言もふた言も言ってやる権利がありますよ(嫁→義父イワさん)

小説内では、女性の使用する「～ではないですか」類は、男性の用例に対して、大分後れて現れるようである。

「～ないですか」と「～ありませんか」の丁寧の度合いについては、石井(1998)は「ではありませんか」「じゃありませんか」「じゃないですか」の順に高いと述べている。「～ではないですか」が入っていないが、「じゃありませんか」と「じゃないですか」の間に位置すると思われる。一般に女性の方が丁寧な表現が要求されるため、小説内では特に時代がさかのぼるほど、「～ではないですか」が使用されなかったのではないかと考えられる。

3-3. 前接部分の「では～」と「じゃ～」

「太陽」「朝日新聞」を除く小説類を通してみると、「じゃ」が409例、「では」が11例である。全体に「じゃ」の方が「では」よりも使用頻度が高い。小説の会話部分では、やや固い表現である「では」よりも「じゃ」が口頭表現として用いられる傾向があることがわかる。

3-4. 現代の使用頻度

現代の小説の『淋しい狩人』では、「～ではありませんか」類が4例、「～ではないですか」類が5例であった。使用頻度にそれほど違いがないといえよう。東京出身の作者ではないが、北川悦吏子『ロングバケーション』（平10: 1998・角川文庫）では、26例⁹のすべてが「～ではないですか」類である。この本はテレビドラマのシナリオが小説化されたもので、現代の若者のことば使いがよく現れている。小説中では、若者だけでなく大学教授も2例、「～ではないですか」類を使用している。作られたものである小説では、作者の使い方によって、使用頻度に異なりがあることがわかる。

一方、朝日新聞で使われる頻度を見ると、「～ではありませんか」類4466例（約26%）、「～ではないですか」類12440例（約74%）で、「～ではないですか」類の方が優勢である。インタビュー記事や読者投稿欄などによく使用されており、実際の言語運用においては、「～ではないですか」類の方が多くなっていることが指摘できよう。

4. まとめと課題

小説を資料に、「～ではありませんか」類から「～ではないですか」類への移行を考えたが、明治30年代あたりから、全体としては「～ではないですか」類が現れてきているものの、その数はそれほど多くはなかった。場面を選ぶ表現であることと、男性の使用に限定された時期が長いということが理由として考えられよう。一方、新聞のインタビューや読者投稿欄では、「～ではないですか」類が優勢になっている。先にあげた市川（2000）の結果によれば、話しことばにおいては「～ではないですか」類が優勢になっており、小説との違いが見られる。

今後の課題であるが、「～ではありませんか」類と「～ではないですか」類の用法の違いについて探りたい。たとえば、提案・勧誘の表現では「～ではありませんか」が選ばれる傾向がある。朝日新聞を対象に「ようではないですか」「ようではありませんか」を検索したところ、「ようではないですか」8例、「ようではありませんか」383例あった。提案・勧誘の「ようではないですか」は、

例5 いま一度、子供心に戻ってじっくり考えてみようではないですか（2000. 5. 7）

例6 それまでは日本の養子として、養父母になってくださった宣教師さんと共に面倒を見ることにしようではないですか（1994. 1. 29）

のような例であるが、検索できた8例のうち1例は次の例7で、提案ではない。

例7 ほんとうは人一倍、好奇心があるくせに、ホンネは隠して「公序良俗」などと古いことをいう。さっきのあなたの話では「危険な情事」を楽しんで見たようではないですか（1988. 8. 3）

9 うち、1例は「人生の先輩じゃないっすか」、1例は「いいじゃんすか」。

つまり、「ようではないですか」が提案・勧誘の用法で使われたのは7例であった。

一方、「ようではありませんか」の例を新しい2011.9.17の記事から100例さかのぼって用法を見たところ、2例が提案ではないだけで98例は提案であった。提案の例は、

例8 この歴史的な国難から日本を再生していくため、この国の持てる力のすべてを結集しよう
ではありませんか (2011.9.14)

例9 こんな不確かな私たちの生だからこそ、今日は私は何をしたら心地よいかを考えようでは
ありませんか (2011.9.17)

である。提案ではない例は、

例10 唄っているようではありませんか (2007.10.26)

例11 まるでロボットや人形のようではありませんか (2005.6.18)

であった。「～ではありませんか」と「～ではないですか」は丁寧度の差だけではなく、用法に差があることもうかがえる。

今後は、資料の幅を広げ、丁寧度との関係を含めつつ「～ではないですか」類の定着過程と、それぞれの用法を考えたい。

参考文献

- 浅川哲也(1999)「形容詞承接の『です』について ―形容詞述語文丁寧体の変遷―」『國學院雑誌』100-5 國學院大學
- 安達太郎(1999)『日本語疑問文における判断の諸相』くろしお出版
- 石井和仁(1998)「日本語口語表現の分析 ―『…ジャナイデスカ』について―」『福岡大学人文論叢』30-1 福岡大学
- 市川千明(2000)「現代日本語の話しことばにおける『じゃないですか』と『じゃありませんか』の乖離現出の量的差異とその規則性の相違を中心に」『桜美林国際学論集 Magis』5 桜美林大学
- 田中章夫(1996)「(行き)マセンデシタから(行か)ナカッタデスへ」『言語学林』三省堂
- 田中章夫(2008)「『マス』から『デス』へ ―丁寧体の変容―」近代語学会編『近代語研究』14 武蔵野書院
- 宮崎和人(2005)『現代日本語の疑問表現 疑いと確認要求』ひつじ書房

(みねだ あけみ 日本語日本文学科)